会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5
TEL　0955-42-2466
HP　arita-sidankai.sub.jp/
arita-sidankai@hotmail.com

大橋康二先生の特別講座を本年度も開催！

本年度も大橋康二先生（県立九州陶磁文化館名誉顧問）による年４回の特別講座を開催、史談会メンバーには昨年以上の学習機会となった。

第１回目の講座は９月18日九州陶磁文化館研修室にて「やきものの見方」を学習した。実際に陶片に触れて材料・成形・装飾法・窯詰め法の視点でいつ頃の時代に作られた焼き物なのか判別するのだが、何度学習しても難しく、今回も悩みながらも楽しい講座となった。

第２回目の講座は10月28日「肥前磁器の海外輸出」と題して、中国の内乱にともなう中国磁器の輸出激減で肥前磁器が東南アジア市場への輸出した背景など詳細を学んだ。

第３回目は11月25日「日本の色絵磁器の創始と発展」の表題で、山辺田遺跡の赤絵窯発見により色絵がどのように推移していったのかスライドを通して学ぶことが出来た。

第４回目の講座は1月17日「鍋島と禁裏御用磁器」、大橋先生をお迎えしての昼食会で歓談のあと生涯学習センターへ移動し講座を開催、本年度も充実した特別講座が終了した。

第１回目講座「やきものの見方」では、大橋先生の解説にメンバーは真剣に聞き入った。

「有田焼の朝鮮輸出」

七月二十三日九州陶磁文化館家田副館長による「江戸時代の日朝焼き物交流」と題しての講義を受講した。

有田焼の発祥には韓国人陶工李参平が泉山で原料となる陶石を発見したことから始まることになるのだが、韓国との貿易についてはこれまで殆ど知られておらず、史談会メンバーにとっては興味ある学習の機会となった。

釜山の倭館に設置された陶器窯などによる江戸時代の日本と朝鮮の陶磁器交流の概説から講義が始まり、三島茶碗や井戸茶碗など当時日本で流行し始めた茶道との関りや、安永年間（一七七二～八一）に有田磁器の朝鮮貿易が始まったこと、さらには十八世紀末～十九世紀前半の中で赤絵町の北島源吾（栄助）の一人に朝鮮向焼物の一手取扱が許可されたことなどの講義に真摯に耳を傾けた。

なかでも、二〇〇七年当時韓国ドラマ「イ・サン」がテレビで放映され大きな反響を呼んでいた。このドラマは名君とうたわれた朝鮮第二十二代王・正祖の波乱に満ちた生涯を描いた時代劇で、イ・サンとソンヨンのラブ・ストーリーも盛り込まれており人気を博した。

このドラマに登場するイ・サンの側近ホン・グギョンの妹でサンの側室となるウォンビンが急逝し、のちに陵の調査が行われた際に磁器製副葬品が公開され、五個の有田焼の小壺と合子があった話など興味の尽きない講義となった。

▲色絵福字磁文小壺（肥前有田窯、1730～70年代、九州陶磁文化館・日閃コレクション、口径2.7㌢、高さ4.6㌢、底径2.6㌢）▼反対側

2019年度活動報告

4月　例会・昼食会（まるいし）
5月　視察研修
　長崎歴史文化博物館
　旧香港上海銀行長崎支店記念館
6月　例会（生涯学習センター）
7月　例会・講座（生涯学習センター）
　「有田焼の朝鮮輸出」
8月　例会（生涯学習センター）
9月　例会・第１回講座
　「やきものの見方」（九陶研修室）
10月　例会・第２回講座（生涯学習センター）
　「肥前磁器の海外輸出」
11月　例会・第３回講座（同上会議室）
　「日本の色絵磁器の創始と発展」
12月　休会
1月　例会＆食事会（まるいし）
　第４回講座（同上会議室）
　「鍋島と禁裏御用磁器」
2月　町内八十八ヵ所めぐり予定
3月　例会（生涯学習センター）予定

本年度も年間を通じ充実した活動になった。感謝したい！

長崎へ視察研修！

年初より計画していた長崎研修旅行は、長崎県文化振興課長宛に講師派遣の依頼書を送付し、長崎歴史文化博物館へは、研修のための貸室利用申請書を送り事前の準備に早期から取り掛かり万全を期した。

今回の長崎研修旅行は、「れきみん応援団」と合同で実施することとなり、国指定重要文化財である旧香港上海銀行長崎支店記念館の見学も取り入れ、研修旅行計画書を作成しタイムスケジュールの調整を行い、長崎歴史文化博物館にて五月十四日に予定通り実施した。

長崎歴史文化博物館では「有田焼と長崎県の焼き物（現川焼・亀山焼・平戸焼）との関りについて」の題で松下久子顧問より講義を受けた。講義終了後は館内にて展示されている焼き物を見学し研修を終えた。

下　長崎文化歴史博物館
左　旧香港上海銀行長崎支店記念館

西洋館勤務と雑感

坂井勝也

れきみん応援団の一員として「国指定重要文化財　旧田代家西洋館」の案内をして来館者との会話を楽しんでいます。どちらから来られたか時々お尋ねしますが、自分の行ったことのある観光地などの来館者とは特に話が弾みます。

昨年とくに印象に残ったのは、タモリさんの影響の凄さです。有田をテーマにした「ブラタモリ」の放映があった翌週からはお客様が急に増え、観光バスツアーもその影響を受けて企画されたとのこと。特に泉山磁石場は、連日観光バスが来て黒山の人だかりでした。「ブラタモリ」では、温泉水が湧いている泉山に、英山が噴火して溶岩が被さり磁石が出来たとのこと。実に二〇〇万年前の出来事です。

十二月に入りますと寒さが厳しくなり、観光客も少なくなりましたが、東京・千葉・仙台など、遠方から来る人の多くは有田観光を目的の人が殆どで、質問も熱心にされます。

西洋館の近くにある有田陶磁美術館は、昭和二十九年五月一日に佐賀県の登録博物館第一号として開館しておりますが、その当時は世界に三つしかない焼き物専門の博物館の一つだったそうです。

また、昭和三十四年には詩人蒲原有明の「有田皿山にて」の陶板が外壁に設置されましたが、美術館の前の広場に沢山の車が止められ、折角の「有田皿山にて」の陶板が見えず危惧しておりましたが、たまたま有田を訪れた身障者の方が車を止めるのに困っておられたのを機に、有田観光協会と有田商工会議所の方々の配慮で陶板前の駐車スペースを確保して頂き「有田皿山にて」の陶板が見えるようになりました。

陶板前の小さな花壇には月見草と白い水引草が一面に咲き、十二月に入ると白い山茶花が加わりました。美術館に来られた方がゆっくり蒲原有明の詩を鑑賞し、白い水引草を見て美術館の焼き物を堪能出来るのではないかと思います。

旧田代家西洋館と有田陶磁美術館がともに来館者が増えることを期待し、令和二年も頑張りたいと思います。

松浦党水軍発祥の地は？

井手邦男

昨年平戸に遊びに行きました。そこで松浦党（まつらとう）の歴史資料館を見学したおり、松浦党の三星の家紋（梶の葉）が描かれているいろいろな漆器に出会いました。

資料館の学芸員さんから、その漆器に描かれていた梶の葉が松浦党の家紋である事、三星の他に梶の木の葉は松浦党が源流であることなど話を聞くことが出来ました。そこで梶の木がどこに現存しているのか尋ねたところ、今福町の梶谷城の城跡に生えているとのことでした。後日、梶谷城跡を見学に行くと歴史が記された説明板には以下のような内容が書かれていました。

『一一八五年：壇之浦での源平合戦、一二七四年・一二八一年：蒙古襲来を戦ったのが松浦水軍であった。梶谷城の築造は一〇九五年：梶谷の山頂に梶谷城を築き警察庁長官に補された松浦源大夫久が家紋に梶の葉を併用しています。久公は梶谷城を本拠として東松浦、西松浦、南松浦、北松浦の各郡と彼杵、壱岐等七百町歩と広大な荘園を統治し各地に勢力を広めていった。久公は七人の男子を各地に配しその地を譲り、更にその子へ孫へと領地を伝え松浦系譜は四十八家その後、五十二家の武士集団となり代々長子が継続したことにより、松浦宗家と呼ばれる由縁である』といった内容でした。

私は三星の家紋だけが松浦党の家紋だと思っていたのですが、梶の葉が松浦党宗家の家紋ということで伊万里市浦ノ崎を越えた県境を下った一～二キロ先にそういった城跡があり、現存する梶の木がありました。ここが松浦党の発祥の地で、唐津から平戸までの一帯を支配していた時代があり、平戸城築城後は支配が島々まで広がっていったようです。

本焼焼成

栗山愼悟

窯の焼成は、焙り・攻め・揚げ火の三段階に分けられる。

【焙り（焚き）】あぶり（だき）
「炙り」とも書き、「ねらし」ともいう。火入れから八〇〇～九〇〇度まで温度を上げる工程。酸化炎で焼成される。八〇〇～九〇〇度は素焼きの焼成温度でもある。この後、窯内の火前・天井・中心部の温度差を少なくするために、温度が上がらないように、下らないように横這い状態を数十分～一時間ほど行う。（窯の大きさによって時間は異なる）

【攻め（焚き）】せめ（だき）
八〇〇～九〇〇度になると火力を一気に強め、焼き物が焼ける一三〇〇度まで温度を上げる工程。煙突に設けてあるダンパーで炎の流れを調節して酸化炎、または、過還元炎にならないように還元炎に調節しなければならない。

酸化炎は酸素を十分に送り入れることにより、燃料が完全燃焼をすること。酸化は釉薬や素地に含まれている鉄分と窯内の酸素が化学反応を起こす現象をいい、白磁の焼き物は黄色く変色して商品としての価値を落とす。または、価値をなくす。酸化は鉄を空気中にさらしておくと錆びる現象をいう。この現象が窯内でおこる。

還元炎（かんげんえん）は酸素量が少なく燃料が不完全燃焼すること。還元は不完全燃焼によって発生する一酸化炭素と釉薬や素地に含まれている酸素が化学反応をおこす現象をいう。還元炎で焼成された磁器は、白色の地肌が現れ呉須も鮮やかな発色をなす。

過還元（かかんげん）は還元炎よりさらに酸素量が少ない状態をいう。過還元で焼成された磁器は呉須の発色が黒ずみ商品の価値が落ちる。

還元炎の調節は、火力とダンパーの操作によっておこなう。攻めに入ると火力を一気に強めると同時に煙突の胸部あたりに設けられたダンパー（炎が煙突から排出されるのを調整する耐火物の遮蔽板）を差し込み調整する。この時、煙突の下部に設けられた開口部（普段は数個の耐火煉瓦で塞がれている）の煉瓦を外してダンパーと併用する。

還元の判断は、窯の側面・天井に設けられた直径三㎝程の色見穴から噴き出る炎で判断するが、判断は窯焚きの目視による経験と感だけに頼られ、ダンパーはミリ単位の動作となる。

火止めの判断は、ゼーゲル錐・揚げて見・パイロメーターを併用して行う。

ゼーゲル錐　ゼーゲルコーンともいう。ドイツのベルリン王立磁器製造所のドクトル・ゼーゲル（一八三九～九三）が一八八六年に考案した窯内の温度を測る道具。指ぐらいの三角錐状の長さ太さで、色見穴から見える位置に立ておき、ゼーゲル錐の設定温度に達するとゼーゲル錐が倒れることにより窯内の温度を知ることが出来る。

揚げて見　窯から揚げて（出して）見るの意。ぐい呑みほどの大きさで、呉須で簡単な文様が描いてあり、側面に穴が開いている。取り出す時は、揚げて見棒（先端が鉤状になった鉄製の長い棒）を揚げて見の穴に入れて取り出す。取り出した揚げて見の釉薬の溶け具合、呉須の発色などを見て火止めの判断をする。

パイロメーター　一〇〇〇度以上の温度を測定できる温度計。

【揚げ火】あげひ
本窯焼成の最終工程。磁器の焼けた温度に達すると、燃料の供給を少なくして温度が上がらないように、また、下らないように横這い状態を一時間ほど行う。その時の窯内は中性炎、もしくはわずかに還元炎に調整する。この時の炎の調節はダンパーの操作によって行い、中性炎の判断は、色見穴から噴き出るわずかな炎で判断する。揚げ火は、素地を焼き締め、溶けた釉薬を素地に馴染ませるために行う。また、窯内の火前・天井・中心部の温度差を少なくする作業。

【火止め】ひどめ
燃料の供給を止める。と、同時に窯内は冷却の時間帯に入る。

【冷却】れいきゃく
火を止めると、炎の通りを調整していたダンパーをもとの位置に引き戻し、また、煙突の下部に開けてある開口部を耐火煉瓦で塞ぎ、窯内の熱を外部へ放出させる処置を行う。
煙突の下部に設けられた開口部をふさがずに開けっ放しにしておくと、窯内をゆっくりと時間をかけて冷却することが出来る。

焼き物は本窯で焼成されるまでは製品としての価値はなく、本窯で焼成され窯から出された時点で焼き物としての商品価値が生じる。攻めは、素地が磁器に変化し、釉薬が硝子質に変化する時間帯でもある。

また、攻めは還元の調節が製品の出来不出来に直接影響するため、炎の調整に十分気を使わなくてはならず、磁器の製造工程、本窯の焼成においても最も重要な時間帯であるため、窯焚きが最も気を使い神経を集中する時間帯である。

なお、窯焚きは窯を焚く職人をいい、窯焼きは陶工を雇い焼き物を製造する事業主をいう。

老いを楽しむ

中村貞光

　些細な油断で肋骨骨折のアクシデントを起こしてから丸二年が経った。ここ数年は物忘れや思い違いなどのミスをしては落ち込むことが多くなり「老化」の二文字をやたらに意識するようになった。年のせいにしたくはないが、この一月で古希の仲間入りをしたので仕方のないことだと自分に言い聞かせているこの頃である。思い起こしてみると物忘れや勘違いなどは若い頃からよくあった。そこでエピソード二つ。

　三十代の頃、製薬会社主催の研修会に出席するため東京駅から新幹線に乗車し岡山に向かった時のこと。名古屋駅で乗車してきた客が私の席に来るなり「ここは私の席ですが？」と「えっ？私の席ですよ」とやり取りしている所へ車掌が通りかかったので、何故同じ座席の切符を二枚も販売するのかと問い詰めると車掌曰く！「あなたの切符は明日の乗車券ですよ！」と、私はとんだ大恥をかいてしまった。丁重に謝罪しそのまま岡山へ。研修会は他のグループに飛び入りで参加させてもらった。研修日を間違う単純なミスなのだがとても落ち込んだ。

　大分在住の五十歳の頃の出来事であるが、これも研修会の開催日を間違ってしまった出来事。八女で行われる某メーカーの工場見学研修会へ家内同伴で参加するため自動車で大分を出発。道中の景色を楽しみながら八女に到着すると、何となく雰囲気が違う。「今日は研修会ですよね？」と尋ねると「研修会は明日ですが？」とのこと。「えっ？」と驚きながら家内の顔を見ると怒った顔！不機嫌な家内を隣に乗せてその日は有田へ向い一泊するはめになった。

　勘違いや思い違いは誰でも経験する。まして五十歳を過ぎれば物忘れなどは日常茶飯事で気にも留めず当たり前と思っている人は多い。

　物忘れの原因は脳の老化が上げられるが、過度のストレスが影響とも考えられる。脳の老化は加齢とともに起こるから病気ではないのだ！老化は誰にでも起こる共通の自然現象なのだから気にすることはないのだ！と居直っていられる人は本当に幸せ者だ。

　さて、年初は今年こそ！と意気込み、新たな目標を立ててスタートするのだが、年々その意気込みも衰えてきた感がある。怪我をせず、大きな病気もせず、穏やかに一年を過ごせたらそれで良いと思うようになったら立派な老人なのかも知れない。

　二〇一五年から始めた十年日記は継続中で、体調管理のための日々の体重測定とウォーキング記録も七年目に突入した。数年前からはメニューこそ少ないが「男の料理」にもチャレンジしている。最近では気が向けば染付にも挑戦し楽しんでいる。

　五十歳までメカ音痴を自認していたが、パソコンを始めてからは時代の流れにも少しは付いていける行けるようになった。最初に購入したウインドウズ９５から数えて現在は八台目になるが、うち三台が元気に動いている。

　簡単に検索をすることで色々な知識を得ることが出来るし、ネット通販で欲しい物は自宅に居ながらにして手に入る。インターネット配信の映画やドラマもテレビ画面を利用し楽しむことが出来る。まさに現在は老人でも利用の仕方次第で趣味も広がるのだ。

　古希に突入した今年からは、意識して「暴走老人」にだけは決してならないよう戒めているが、ともあれ老化を楽しみながら過ごしたいと思っている。

趣味の博物館めぐり

鶴　一樹

　私は博物館を訪ねるのが趣味の一つになっています。

　一月七日から十日まで、ＪＲ青春切符を利用して、安上がりな旅を楽しみました。

　博物館で何を見るのかというと、「石」です。火山岩、花崗岩、安山岩、流紋岩、陶石、カオリナイト、絹雲母、黒曜石など、「石」とはどの一つも同じものはなく、四十六億年の間循環しています。

　今回は岡山市立オリエント美術館へ行ってきました。長いオリエントの陶器の歴史に感動しました。

　焼いた土器が発明される以前の比較的柔らかい石を削って造った石製容器。ＢＣ六〇〇〇年頃のものが展示されていました。そしてＢＣ四五〇〇年頃のイランの土器、やがてモンゴルに征服されＡＤ一二〇〇年、中国の磁器と融合され染付も作られます。

　私は石も陶器も磁器も何か不思議な一族と思っていて、謎を少しでも解こうと日頃から博物館めぐりを重ねております。

「有田光明新四国」について

前田順三

四国八十八ヶ所、西国三十三所観音霊場を模した写し霊場というものが全国各地に数多くある。写し霊場というのは、種々の事情により本霊場まで行けない人々のために、近くの地に霊場を作ったものと思われる。「有田光明新四国」もその一つである。

有田町歴史民俗資料館発行の「皿山びとの歌」（平成五年十二月一日発行）、有田町発行の「有田の民俗」（平成八年三月三十一日発行）によれば、有田光明新四国は、明治期に本四国（四国八十八ヶ所）を巡った人が、それぞれの札所（ふだしょ）の砂を分けてもらい持ち帰り、八十八ヶ所の札所を作り巡ったことから始まったと言われている。「『有田』光明新四国」というものの、明治期の西松浦郡有田郷のことであり、現在では有田町から伊万里市二里町までまたがっている。

お参りに巡り歩く人々を、本四国では「お遍路さん」と呼ばれているが、有田では「おめぐりさん」あるいは「めぐりさん」と呼ばれている。毎月十日に「月めぐり（札所の一部をまわる）」を行い、四月と九月には「大めぐり」といい、六日間かけて八十八ヶ所すべての札所を廻ったと言われている。しかし、春と秋の彼岸の時におめぐりさんがあったとも聞いている。

おめぐりさんの姿、装束は本四国と同じような「白衣」「輪袈裟」「念珠」「すげ笠」「金剛杖」「頭陀袋」「鈴」等々である。そして、先達（せんだつ）さん（何度も遍路を経験し、指導的な世話人）の後に続き、札所で納札（おさめふだ-自分の氏名、日付等を書いた紙の札）お賽銭や米を上げお経をあげる。

昭和五十年代にある人が書いた手記によると、参拝者の一行の数は三十～四十名だったと書かれてあるが、別の文献では平成になってからは、二十名もいれば多い方であったという。また、後では自動車で五日間ぐらいで廻ったり、五回ぐらいに分けて廻る十日めぐりというものもあったと言われている。

大めぐりの時は、大師堂のある所ではお接待（おせっちゃ）といい、お茶やお菓子などを振る舞いマッチを渡す。「有田の民俗」に掲載されている写真には、おにぎりや漬物、お茶などの接待風景のものもある。

しかし、平成十一年四月の「有田巡り百周年」以降と思われるが、現在は「おめぐりさん」はほとんど途絶えてしまっているようである。

境石について

馬場正明

有田で境石（境界標）といえば佐賀領・大村領・大村領の接点に立つ三領石が有名ですが、泉山の磁石場付近にある二種類の境石を紹介します。

一つめは、有田町と武雄市山内町の境界に横たわった石柱と其処より五十メートル程離れた個所にある石柱です。二本の石柱とも幅三十センチメートル（一尺）、高さ一・五メートル（五尺）尖頭角柱状をしており、四面に「従是西松浦郡有田皿山境」「明治九年七月双方戸長立会建之」「是□東西一間半以内土石不可掘取事」刻まれています。

そこで思うのは、現在地区を表示するのに○○県××郡と表示しますが、建設当時は県が佐賀県であったり、伊万里県、長崎県、その後佐賀県へと目まぐるしく変わることを見越してなのか。或いは、元々ここが郡境なので地名を郡の名から初めて県名を省いたのだろうか、また有田町が有田皿山となっているのは有田町が明治二十二年の町村制の施行を考えればうなずけます。しかし東杵島郡とは一体どこだ？と疑問も湧きますが、西松浦郡が明治十一年に成立する以前は今の長崎県と佐賀県をまたぐ大きな松浦郡であったことを考えると、「これより西」「これより東」と読めば良いと納得した。

二つめは、同じ有田町と武雄市山内町の境界線上に二十～三十メートル間隔で埋め込まれた石柱です。石柱は幅石十五センチメートル（五寸）、高さ五十センメートル（枯葉に埋もれたものもあり）の角柱で、有田を向いた面に「境」反対の面に「鍋島家」と刻まれており、鍋島藩の本藩と支藩との境石は、嬉野では番号を刻んだ番号石が用いられていたのを考えると「ここからは鍋島家の所領だ」と強い意志を示しているようです。

一体誰が、何時、どんなキッカケで設置したのか謎だ。探ってみたい。

※従是西松浦郡有田皿山境

※鍋島家の裏側には境が刻まれている

文化財パトロール

大串和夫

私は平成二十一年四月から約十年間、有田町内における六十四ヶ所（旧有田町五十一ヶ所、旧西有田町十三ヶ所）に上る窯跡の監視を有田町文化財パトロール員として行ってきましたが、今年で十二年目になります。そこでここ十年間の旧有田町の盗掘の状況をお伝えしたいと思います。

まず、パトロール員になって最初の盗掘発見は、平成二十二年五月の小溝上窯跡の盗掘です。その後、次のようにほぼ一年毎に盗掘がありました。

記

平成二十四年五月　小物成窯跡
平成二十四年九月　小物成窯跡
平成二十六年五月　小溝中窯跡
平成二十六年八月　山辺田窯跡
平成二十八年十一月　小溝上窯跡
平成三十年七月　山小屋窯跡
平成三十年十一月　小溝上窯跡

などです。ここで盗掘が一番多かった所は小溝上窯跡です。

小溝上窯跡（一～五号窯跡）一六〇〇年代
小物成窯跡（一～二号窯跡）一六〇〇年代
山辺田窯跡（一～九号窯跡）一六〇〇年代
小溝中窯跡　一六一〇年代
山小屋窯跡　一六四〇年代

いずれも有田では一番古い創業期の窯跡です。

これらの穴を掘り広げる盗掘行為は遺跡を破壊するだけでなく、一度破壊されると規模や構造などの情報が失われてしまいます。盗掘対策は、町の教育委員会などが条例を制定し、警告看板を設置したり罰則強化を行っていますが、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての窯跡を狙った、売買目的の盗掘は依然として続いています。

個人同士で売買するオークションを見ると、陶片は『初期伊万里』や『古唐津』などが人気の分野で、数千円の単位で売買されています。

山の斜面などの目立たない場所や人目につかない場所にある窯跡、特に古い時代の窯跡が狙われやすく、今後は地域住民の協力を得ながら、個々の窯跡に応じた盗掘対策が必要と思われます。

※有田町では平成二十一年に有田町文化財保護条例を改正している。

※小溝中窯跡の盗掘現場　平成26年5月

目からウロコ（その二）

吉永　登

鄭成功と肥前陶磁の深い関りについて、大橋先生の随筆「古伊万里談義」によって知ることが出来たのは『驚き』であった。

日本では国性爺合戦で有名な鄭成功は、明朝の海商として平戸で活躍した鄭芝龍を父に、平戸川内の田川マツを母として平戸で生まれた。

七歳の時に父と共に中国に渡り、明王朝のために働いたが、新王朝に滅ぼされた後も「抗清復明」の旗印を掲げて不利な戦いを続ける中で、台湾に侵攻して占領中のオランダ人を追放し政府を樹立、海上権を獲得した。清朝は海禁令（一六五六）、遷界令（一六六一）を発令し経済封鎖を実施するが、鄭成功は一六六二年、病のため三十九歳で死去する。

大橋先生の「古伊万里談義」によると、オランダも商館を置き、肥前陶磁を東南アジアに輸出した鄭氏の根拠地でもあった台湾で、肥前陶磁の発見が報告されないことを不思議に思っていたところ、一九九八年、台湾大学の謝明良氏から「宣明」という銘があるのは肥前陶磁ではないかとの問い合せがあった。この「宣明」という銘は、中国にも例のない有田だけのものである。（大明の「大」を宣徳の「宣」に変えたもの）

この発見によって、鄭成功が有田の肥前磁器を東南アジアに輸出していたことが明白になった。

「宣明」という銘は、一六六〇年代から七〇年代に主に用いられたもので、まさに鄭氏の台湾支配時代にあたり「有田」との関係を証明する貴重な発見であった。

台湾では、鄭成功は孫文、蒋介石に並ぶ「三人の国神」の一人として尊敬されている。彼がいなければ清による海禁令もなく、有田焼の本格的な海外輸出もなかったであろう。

次の連載随筆

来月2日から

古伊万里談義

大橋　康二

■著者の言葉■

西日本新聞社

古伊万里談義（NO1～48）

佐賀県立九州陶磁文化館
副館長　大橋　康二

西日本新聞
2001年（平成13年）11月2日～12月29日

※「古伊万里談義」西日本新聞に二〇〇一年から四十八回に亘り連載。

肥前で最初の教会

鶴美百合

鹿島の若宮神社は、肥前浜宿にあります。現在は、酒蔵観光で成功しているようです。さて、浜宿の説明では、肥前浜宿の街並みは中世（鎌倉・室町時代）にさかのぼる古い歴史を持った町で、江戸時代は長崎街道多良往還（多良海道）の宿場町として、また有明海に臨む港町として豊かなまちなみが造られたとあります。港町・宿場町として近世（江戸時代）から近代（明治・大正・昭和）を通じて栄えてきた。経済力と豊かな地下水、おいしいお米によって酒造りが盛んとなり、現在でも大型酒蔵が建ち並んでいるとあります。

漆喰で重厚な酒蔵通りの近くに若宮神社がひっそりとたたずんでいます。実は、その神社の入り口に、最近まで看板が立てられていたはず！！のものが、なんと、どこを見てもないのです！！後に、これは故意に取り除かれたたと知るはめになりました。

鹿島の若宮神社（肥前浜宿）

ドミニコ会が肥前に初めて建てた教会跡

慶長十二年（一六〇七）カトリックのドミニコ会修道会は藤津郡浜町に、肥前で最初の教会ロザリオの聖母堂を建てた。三名のスペイン人宣教師達は、追放される慶長十八年（一六一三）十月八日まで布教活動を行った。その結果、多くの人々がキリスト教にこころを揺り動かした地である。

平成四年五月吉日　大村方区民一同　肥前キリシタン研究会

※若宮神社の前に立てられていた看板の一部分

その看板には、次のような説明がしてありました。

「若宮神社は、慶長十二年（一六〇七年）、スペインのドミニコ会が肥前で最初の教会を建てた場所。三人のスペイン人宣教師がいて、キリシタンが弾圧されるまでの数年間、ここを拠点にして九州一円で布教活動を行っていた」と。簡単ではありますが、歴史的にみれば有田焼が始まるきっかけになったのでは？と私の得意な？、個人的な推理ですが、それにしましても、珍しく三つの言語（スペイン語、日本語、英語）で書かれていたのです。

なぜ、現在、この看板が取り除かれているのかを、私なりに、調べてみましたところ、教育委員会では、台風等で、老朽化しているので取り除かれたのでは？という事でした。また、近所の方によると、「取り除いたよ。そいが、ほんのごとか、どうも、わからんけんね～」と、今は、それどころではない、酒蔵の事で頭は一杯さい！というニュアンスが伝わってきました。また、観光協会でも、その看板の真意はわからないとの一辺倒。

そこで、頭を切り替えて佐賀県庁で、看板部署？に行き当たりました。電話で問い合わせしたところ、かかりの男性がＰＣでぱちぱちと素早く調べて、「そうですね～、看板の出どころが、肥前キリシタン研究と地域の人達により立られているようなので、この看板が再び若宮神社に立つのかどうかは、佐賀県が関知することではないようです」との事でした。

そうか、ドミニコ会の教会があったという看板は、このようにして、取り除かれたのか、そうか、そうか、そのうち、佐賀県にキリシタンがいた！などという人もいなくなってしまうのだろう、

そして、川上茂治先生、肥前キリシタン研究の方々の並々ならぬ努力があって研究なされてきた、キリシタン研究もこのように、簡単に忘れ去られるのだと。なんとも寂しくなってきました。

そこで、佐賀県とキリシタンとは関係がないと思う方がほとんどだと思われますが、佐賀市地域文化財データベースサイト「さがの歴史・文化お宝帳」によると、なんとありました！

慶長年間の城下絵図の中に、材木町の北方、長徳寺と堀をへだてて、柳町の東部一帯に東西四十七間、南北四十三間の広大な面積に南蛮寺が記載されてはいるが、今はその面影を偲ぶ何物も見当たらない。慶長十一年（一六〇六）にドミニコ会のアロンソ・デ・メーナ神父が佐賀の領地内で教会を建てる許可を、佐賀の大名勝茂に申し出た。このとき、領内に教会を建てることを許したが、その前にガッコウと呼ばれる有名な僧と相談しなければならないと言った。

このガッコウと呼ばれた人物は、当時徳川家康の顧問で、鍋島家へも大きな影響力を持っていた小城の円光寺生まれの元佶和尚であった。この僧の協力で教会を設立することができたが、この元佶和尚の寛大な態度にデ・メーナ神父も非常に驚くとともに感謝したといわれている。

当時仏教とキリスト教の対立が激しい時代だけにこのような形で教会設立の許可がなされた例は、佐賀以外に日本のどこにもなかったことであるといわれた。

デ・メーナ神父は早速慶長十二年（一六〇七）に鹿島の浜町に教会と修道院を建てた。また翌年鹿島に別の教会を建設した。柳町には、慶長十三年（一六〇八）に建てられた。

またドミニコ会の神父たちが浜町に教会を建てた頃、イエズス会の神父たちは嬉野町の不動山に教会を建設した。このほか白石町の須古にも建てられた。（次のページにつづく）

ところで佐賀の大名は、キリシタンに対し、好意はもっていたが、徳川家康が慶長一七年（一六一二）に、第一回のキリシタン禁教令を出し、つづいて慶長一九年（一六一四）に出されたものは、今までにない厳しいものであったし、その後秀忠、また特に家光はますます徹底的に力を入れた。幕府の度重ねての禁教の命に従い、佐賀で教会の神父を追放したのは、慶長一八年（一六一三）十月であったので佐賀での布教活動は、僅かに五年間であった。

佐賀の南蛮寺教会の姿を今に見ることはできないが、神戸市立美術館所蔵で、狩野永徳の弟宗秀の筆になる扇型の洛中洛外図に書かれているものを見て想像するしかないのである。（出典：ふるさと循誘）

さて、最後に『歴史あるドミニコ会の看板を再び立てたい』と私は勝手に思っております。有田と鹿島は関係がないといわれるとは承知しておりますが、できましたら、若宮神社の地域の方と、肥前キリシタン研究会そして、鹿島カソリックの神父さん、そして有田の史談会等と協力したら、看板が立てるかもしれないと淡い希望を抱いております。

ドミニコ会
正式名称：説教者修道会
Ordo Fratrum Praedicatorum

ドミニコ会紋章

略称	OP
設立年	1206年
設立者	ドミニコ
種類	カトリック教会の修道会
目的	キリスト教宣教、他
重要人物	アルベルトゥス・マグヌス トマス・アクィナス シエナのカタリナ
ウェブサイト	http://www.op.org/

古物の誘惑　パートⅡ

山口信行

自分なりの古伊万里への関心が大いに高まっていた五十歳頃のことだと思うが、何で知ったかは定かではないが、ポーセリンパークでオークションがあることを知った。焼物を中心としたものだったようだが、他のものもあったかも知れない。ただ、その頃の私の関心はもっぱら古陶磁を中心としたものだった。古伊万里に関しては、いっぱしの自信まがいのものを持ち始めた頃でもあり、ちょっと覗くだけでも行ってみようかと思って出かけてみた。

後で分かったことだが、そのオークションの司会というか、それを仕切っていたのが何と中村氏（中村貞光氏）だった。もちろん、その時、氏とは全く面識はなく、数年後ガイドでご一緒することになるとはゆめにも思わなかった。つくづく出会いは面白いものである。

オークションに行くのはもちろん初めてだったが、行ってみれば、けっこう多くの人が集まっておられた。会場にはこれから競りにかけられる品々が木箱に入れられ並べられていて、私も端からザッと目を通してみた。フト一点の品に目が釘付けとなった。そこには，天狗谷窯の茶碗‘とあった。あ、これはいいものだと直感した。いいものとは本物ということである。金直しがされていて堀の手の可能性もあったが、比較的状態はよかった。ただ、値段も，よかった‘。おそらく図録とかで見てたのだろう、間違いはないと自信はあった。

席にもどるとオークションが始まった。いよいよその品を中村氏が読み上げる。誰も手を挙げない。「ありませんか？」との、よく会場に通った中村氏の声。そう手に入る品ではないと思った瞬間、私は手を挙げた。他にはいない。すると、出品者の意向を受けられたのか中村氏が私に向かって、もう少しアップは？との問い。私は即、ギリギリですと応える。そこで何とか落札の運びとなったのである。

※昨年度に投稿された「古物の誘惑」のつづきになりますので、昨年度分から再度お読み下さい。

2006年3月20日に開催された第1回古伊万里オークションの会場風景
司会は中村氏

第1回古伊万里オークションで競り落とした古伊万里

編集後記

正月飾りが取れる前から今年も会報づくりに取り掛かりました。毎年この時期から準備に入り、毎日皆様からの原稿を待つのですが、今年も根比べの日が続きました。

原稿が届くと入力を開始、文字入力はさほど苦にならなくなったし、全体の構成（レイアウト）を考えるのも楽しい作業です。各々の投稿に取り込むカット（写真やイラスト）は、原稿の内容に合わせて創作するのも意外と楽しめる作業です。

今年は昨年末から早めに号令を掛け過ぎたせいか、全員共に投稿の文字量が大幅に増え、紙面の拡張と構成に手こずるはめになりました。

一年間の集大成とも云うべき会報の発行は事務局としての一大イベントで、大いに楽しめる二ヵ月間でもあります。本年度も会員の皆様には催促のメールを何度も送り、プレッシャーをかけ続けましたが何卒ご容赦をお願い致します。